現代イギリス社会思想史から都市文化構造論へ*
—研究の道程—

張　光　夫**

I　近代イギリス社会思想史研究の頃

私は1956年に関学大経済学部を卒業して同学部の大学院に入学した。そこで経済学史、社会思想史担当の堀経夫先生の御指導を受けながらジョン・ステュアート・ミルの社会思想を研究していくことになった。堀先生はアダム・スミス、デヴィット・リカードなどのイギリス古典経済学説史研究の第一人者だったが、社会思想史的視野からの分析の意義と必要性をも充分認められていて、私自身はこの視野からJ・S・ミルが先達ジェレミー・ベンサムの功利主義思想をどのように修正し再構築していったかという課題に取り組むことにした。ミルは思想上の師ベンサムとその説を忠実に継承していた厳父ジェイムス・ミルの功利主義、快楽主義的人間性論を苦難を経ながら批判的に克服していった。ミルはすべての快楽は量に換算できるとするベンサム説を否定して人間性には＜尊厳性 dignity＞という上質の快楽を保持する余地があること、さらに社会的奉仕意識という「社会感情」を保持していることを論証した。さらにその論理の延長線上に、倫理準則としての「効用」にはベンサムのいう利己的人間（ホモエコノミクス）の快楽計算による利益だけではなく、生長しうる能力と個性を持つ人間の将来的利益を含めて考慮するべきだと論じた。

近代イギリス社会思想史の系譜上ミルの存在はひときわ大きなものであり、経済学、政治学の分野にもひろく影響を及ぼした。私はミルの社会思想が19世紀末に高揚したイギリス社会主義思想にいかなる影響を及ぼしたかに関心を持ち、大学院後期にはそのテーマで研究を続けていくことにした。

イギリス社会主義思想は、運動を伴って政治勢力化した1880年代以前にロバート・オーエン、T・H・グリーン、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスなど数多くの思想上の先達がいた。私はそうした先覚者と並んでイギリス社会主義思想の一翼を形成したフェビアニズム——シドニー・ウェッブ、グレアム・ウォーラス、バーナード・ショウその他の知識人たちが1884年に結成したフェビアン協会のメンバーが提起した思想、理論の内実にミルのそれがどのように流入しているかを中心に分析を進めていった。

ミルは主著「経済学原理」(1848) の一章で社会主義—サン・シモン主義、フーリエ主義—への関心と評価を示しているが、晩年の「社会主義論」(1889) では生産領域では改変不可能な経済法則も分配領域では改変可能であり、税制改革をも含めて土地と基幹産業の公有化が所得再分配を実現するための最適の経済政策であると主張した。この提案はフェビアニズムの理論・政策論集「フェビアンエッセイズ」に採り入れられ、その後結成された労働党 (1906) の基本政策の主要項目となっていった。このことを通して現代イギリス社会主義にミルが及ぼした影響を捉えられるように思う。

II　社会思想史方法論の検討を通して

1960年に発足した社会学部の専任講師として採用された私は、当初から社会思想史（西欧）を担当させられた。講義をやり始めてすぐこれは相当

*キーワード：世紀末のイギリス社会主義、都市記号論、〈場〉
**関西学院大学社会学部教授